

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：84202

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2013～2016

課題番号：25300006

研究課題名（和文）湖沼比較民俗調査を通じた国際的博物館・大学連携研究のモデル構築

研究課題名（英文）International Cooperated Researches of Comparative Folk Customs around Lakes between Museums and universities in China and Japan

研究代表者

用田 政晴（YODA, Masaharu）

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・特別研究員

研究者番号：00359259

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,400,000円

研究成果の概要（和文）：琵琶湖と中国の大湖・洞庭湖における水辺環境の民俗事例を対象に、比較民俗調査を中国・湖南省博物館や河海大学など大学・博物館・関係研究機関とともに協働で調査研究を行った。これにより、国際的な博物館・大学連携による人文科学研究のモデル事例を確立し、稲作発祥の地である長江中流域の洞庭湖を起点に、下流の太湖も含めて稲作や水田養魚、淡水定置網漁の工り、水上居住民の家船分布などを航空写真から探査して記録化・分析する研究法の開発を行った。さらには、これらの成果は企画展示および国際連携講演会として発表し、国を超えた博物館提携・協定などが、研究調査・展示公開など実質的内容を伴うものとして確立させた。

研究成果の概要（英文）：In collaboration with the universities, museums and related research institutions such as China Hunan Provincial Museum and Hohai University, we conducted research on comparative folklore survey with customs of the waterside environment in Lakes. As a result, we established a model case of humanities science research through international museums / universities collaboration, starting from the Tongting Lake in the middle of the Changjiang River, including rice cultivation downstream of Taihu Lake, paddy field fish, freshwater setting net we developed a research method to explore and analyze the distribution of households such as fisheries and waterborne residents from aerial photographs. Furthermore, these results were announced as exhibitions and international collaborative lectures, and museum building tie-ups and agreements, etc. crossing the country were established as those involving contents such as research and exhibition disclosure.

研究分野：考古学 民具学 博物館学

キーワード：博物館 湖沼 水環境 国際交流 長江 生活生業 図面記録 比較民俗

1. 研究開始当初の背景

(1) 琵琶湖の稲作漁労民俗

琵琶湖水系の総合的保全と水資源の活用のための「琵琶湖総合開発計画」は、1972年から25年間にわたって実施された国の事業である。これに伴い琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査が5年間行なわれ、同時に滋賀県有形民俗文化財収集調査事業として18年間にわたって3,970件、6,514点の農具・漁具資料を集めて16冊の報告書が刊行された。そしてこれらの琵琶湖の民俗資料は、日本を代表する稲作漁労文化コレクションとなった。

このような琵琶湖と不可分に結びついた稲作と淡水漁労を中心とする博物館資料の先駆的な整理の在り方については、学会でその方法論を発表し(用田 2009a)、民具資料の用語整理を行って近江の通史的理解も試みた(用田 2009b)。さらには琵琶湖に特徴的な民具の分析を進め、展示と研究成果図録(用田編 2012)を2012年1月に公開した。

(2) 琵琶湖と中国の湖沼の関係

滋賀県と中国湖南省は、琵琶湖と洞庭湖という湖が取り持つ縁で、1983年に友好県省協定に調印し、2013~4年にかけては協定締結30周年の諸事業も計画されていた。

そんな中、我々は水辺環境の社会民俗学的調査を積極的に行うようになり、中国・長江下流域での成果をあげてきた(楊 2012a、楊 2012bなど)。また近年、長江中流域がアジアにおける稲作発祥の地として注目され、独特のエリなどにみる淡水漁労と共に長江下流域の太湖周辺を經由して日本列島への伝播してきたことが明らかになってきた。

そして、水田開発と共に稲作と結びついたエリなど大型漁具や水上生活者でもある漁民の家船の分布など、民俗事象の歴史的追究も必要になってきたのである。

2. 研究の目的

本研究では、琵琶湖と中国の太湖・洞庭湖における稲作と淡水漁労など水辺環境の民俗事例を対象に、琵琶湖との比較民俗調査を中国・長江中流域にある湖南省博物館などの協力を得ながら、長江下流域、南京市の河海大学環境工程学院など大学・博物館や関係研究機関とともに協働で調査研究を行おうとしてきた。これにより、国際的な博物館・大学連携による人文科学研究のモデル事例を確立する。稲作発祥の地である長江中流域の洞庭湖を起点に、下流の太湖も含めて稲作や水田養魚、それと不可分に結びついた淡水定置網漁のエリ、水上居住民の家船分布などを航空写真から探査して記録化・分析する研究法の開発を行い、容易に現地調査を行えない海外など遠隔地等における予備的民俗調査法の確立を図る。同じ東アジア地域にある洞庭湖・太湖と琵琶湖との比較の成果は、博物館学的な意義も含めて、企画展示および国際連携講演会として発表し、国を超えた博物館提携・協定などが、研究調査・展示公開という実質を伴うものとして確立させるという三つの目標を掲げてきた。

3. 研究の方法

上記2の目的にかかわる民俗調査法の確立については、パソコンで手軽に検索・観察できる航空写真をもとにしながら必要な情報のみを資料としていく考古・民俗事例の記録化を図ってきた。その成果の一部については、家船についてとりあげ、琵琶湖の家船の有無を検討した論文(用田 2011)、および総括的に詳細に紹介したものがあつた(用田・楊ほか 2014、用田 2014、用田 2016)。

このような民俗事例の観察は、中国・太湖や洞庭湖のエリ・家船の分布、そのおよその規模と数を調べるために用いたもので、一部、水田・水路・運河・溜池の展開と分布、土塁や環濠など集落遺跡の現状や周辺環境も観察した。これらの写真は、撮影年月日、

縮尺、標高、方位、緯度・経度等の付属するデータが明らかであり、2 地点間の距離をほぼ正確に計測することが可能であった。また、容易に現地踏査が行えない遠隔地や規模を推定しにくい巨大な施設・設備を、簡単に必要なもののみ強調して観察・記録化するのに適した資料であった。さらには数年から数か月単位で写真が更新されており、いわゆる土地利用や土地形状や大型事物の分布変化のモニタリング調査も可能であった。ただ、いずれにしても現地での実際の確認は必要であった。

4. 研究成果

(1) 調査研究事業の概要

これまで広く公開されている中国・洞庭湖と太湖水系の航空写真により、淡水大型定置網のエリおよび家船の集中するモデル地域を探し、およそその地点を地図上にあげていった。また、それまでに判明していた太湖東岸・蘇州市近郊の宝帶橋付近のエリおよび蘇州市太湖漁港村・陸港馬頭村の家船、洞庭湖東岸・岳陽市月山の沿岸・沖合 2 種類のエリについて、航空写真をもとに縮尺 500 分の 1 から 1000 分の 1 程度の図面化作業を行った。

さらには、これまで明らかになっている洞庭湖・太湖水系における稲作と淡水漁業に関する地図・文献・写真など基礎的資料の収集や複写を行い、あわせて予備的踏査の中で実物資料の収集も一部行っていった。

2014 年度は、前年度に実施した網羅的な洞庭湖および太湖のエリ、家船およびそれらに付随する水辺環境の総括的な情報を図化し、その変化と政策との関係や水質との関わりなどの分析を行い、排除されつつある家船民と水質改善政策との関連を明らかにした。

こうして、2 年間の研究事業の中間報告として、総括的・網羅的な洞庭湖・太湖と琵琶湖との湖沼環境、特に稲作と淡水漁業に主眼をおいた比較民俗調査結果の実例を琵琶湖

博物館が湖南省博物館および河海大学の協力のもとで、琵琶湖博物館企画展示を開催した。これは、年に一度しか開催しない琵琶湖博物館の大型プロジェクトであり、湖南省博物館のみならず湖南省政府外事弁公室・中華人民共和国駐大阪総領事館等の理解と協力を得て行った。

あわせて日中両国語を併用した新しいタイプの企画展示図録をまとめた。特にこれまでの琵琶湖と洞庭湖・太湖を通じた日中研究交流史をふまえて、博物館同士、あるいは研究機関同士の協働関係の記録にも重点を置きながら、当該年度までの研究成果を詳しくとりまとめ、その幅広い成果公表に努めた。

その後は、湖辺の干拓水田地図や水田放棄後に内湖再生を図った図面、さらには長江中流域の新石器時代農耕集落遺跡の構造図等まで、航空写真を利用した図面資料の作成を図った。そして、洞庭湖と太湖のこの 5 年間の水辺環境変化を記録し、琵琶湖がたどってきた近代化との類似性や違いを明らかにし、そこにどのような水辺に対する思想・論理の違いがあったかを、日中の博物館に大学を加えて実際に議論したところである。

(2) 東アジア比較民俗調査

エリは、主に淡水域での定置網漁法で、植田文雄によると琵琶湖では現在約 170 基のエリが確認できる。そして、小さなものは漁港などで見かけるブラック・バスなど外来魚駆除用で、最大のエリは琵琶湖大橋の南の東岸にあるものといわれてきた(植田 2013)。一方、研究代表者である用田が写真(2015 年 3 月 31 日撮影)で確認したところによると、琵琶湖で最大規模のものは、琵琶湖大橋北詰めの真野川河口近くの 2 基が、最も規模が大きい。かつて 3 段の全長約 520m と報告したが(用田 2016)、改めて計測すると、2 基のうち南のものが全長約 506m、北に隣接したものが約 495m を測るものであった。

南湖東岸のエリについては、衛星写真をも

とに全長の平均値を出すと約 150mであり、外来魚駆除用の 70~80m規模のものを除くと平均 180m、長いものでも 210~220mであった。

エリは魚の習性を利用した主に淡水域での漁法で、アジアのモンスーン地帯から日本列島の内水面にまで展開している。日本では、類似するものが島根県宍道湖、鳥取県東郷湖、福井県三方湖・久々子湖、秋田県八郎湖、青森県高瀬川などにおいて広く見られ、フィジーやトンガ諸島、ジャワ島などでも類似するものが知られている。現在でも、アンコールワット遺跡に近いカンボジアのトンレサップ湖では、平面形で見ると矢の角度がかなり鋭角になったエリが、湖岸から沖合に向かって数 10 基伸びているのも実見したことがあるし(用田 2009b) 今回、研究に使用した衛星写真でもこれらは容易に観察できた。

(3) 共同研究と成果公表の経緯

2013年7月に、本研究事業の研究代表者である用田は、湖南省博物館との研究友好協力協定の締結を前提にして打ち合わせを湖南省長沙で行い、湖南省博物館による紹介のもと亜欧水資源研究利用センター、湖南師範大学、常德市博物館、常德規制博物館、長沙簡博物館、湖南省森林植物園、岳陽博物館、東洞庭湖国家級自然保護区標本展覧館との協力関係も確認した。そして、同年11月19日に「琵琶湖博物館と湖南省博物館の相互協力に関する覚書」を締結した。

その前後には、河海大学の主導のもとで、中国水産科学院淡水漁業研究センター、中国科学院南京地理湖沼研究所、中国科学院洞庭湖湿地センター、中国科学院亚热带農業生態研究所、安徽省水利水電観測設計研究院などを交えて研究交流を行ってきた。

そして「水環境の保存と活用に向けた国際的博物館・大学・行政研究機関連携調査・資料製作および公開事業」と題して、日本と中国の2会場で展示および講演会を企画した。

2014年3月22日に琵琶湖博物館ホール等において湖沼環境の多面的理解をテーマに講演会『魚米之郷を語る - 太湖・洞庭湖の水辺の暮らし -』と記念ミニ展示を開催した。また、その一週間前に、湖南省長沙市の日系の大型商業店舗・平和堂五一広場店でのフロアを一部利用した特別展示を4日間開催し、3,500人以上の中国市民の来場を得た。

2014年7月22日から11月23日までは、琵琶湖博物館において企画展示『魚米之郷 - 太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし -』を開催し、入場者数は3万人を超えた。また、レストランを利用して、企画展示の特別案内、中国音楽と中国湖魚料理および研究成果講演会を組み合わせた新しい催し「魚米之郷を楽しむ」も11月1日に開催した。さらにその展示の終了をうけて、12月に中国・河海大学で特別セミナーを開催して、かつて研究協力者であった川那部浩哉とともに研究分担者の楊平と研究代表者の用田が意見を述べる中で、太湖と琵琶湖の水環境をテーマに、大学や関係研究機関の研究者や学生と討論も行った。

2015年度は、中国湖沼の湖辺における干拓域や内湖再生を図った個所、さらには新石器時代農耕集落等まで、これまで継続的に行ってきた航空写真を利用した基礎的図面資料の整理を行った。こうした一連の調査研究成果は、『琵琶湖博物館研究調査報告書』第28号として総括的に取り上げて、図面資料は公表し、その方法論についても詳細に記述して刊行した(用田編 2016)。そこでは、琵琶湖地域の湧水環境保全につながる基礎資料整備の方法論についても論を進め、聞き取り調査の詳細な記録化などを図り、南西諸島における大陸からの稲作伝播とも絡んだ井戸の実態調査と歴史的変遷モデルの成果まであわせて発表した。

(4) その後の方向性

先述のいくつかの成果(用田 2016 など)

発表後、さらに日本列島における弥生時代の開始と稲作伝播の系譜の追及を行うための調査を遼東半島で行い、また長江上流域にあたる雲南省の水田の棚田における水田養魚の実態調査等も行った。

あわせて、これまで行ってきた稲作と淡水漁労の象徴でもある水田養魚の日中における民俗事例をモデルとして、現在、琵琶湖での「魚のゆりかご水田」政策への何らかの提言を日中共同で取りまとめることを目指してその後も議論中である。このように博物館・大学等による国際的連携調査・研究、日中両国での講演会・記念行事・展示、協定締結、そして成果公表と評価、政策提言という当初の計画に沿って事業を実施してきた。

<引用・参考文献>

- 植田文雄 2013「湖の恵み - 琵琶湖の漁業史」『佐加太』第 37 号
- 用田政晴編 2006『琵琶湖博物館資料目録』(民具資料 1) 滋賀県立琵琶湖博物館など
- 用田政晴 2009a「琵琶湖博物館における技術と民具の保存・継承」『日本民具学会第 34 回大会研究発表要旨』日本民具学会
- 用田政晴 2009b『湖と山をめぐる考古学』サンライズ出版
- 用田政晴 2011「太湖の家船と琵琶湖の「家船」」『淡海文化財論叢』第 3 輯
- 用田政晴編 2012『民具を科学する - 明治の絵図と現代の実測図から見た近江の民具 - 』滋賀県立琵琶湖博物館
- 用田政晴 2014『魚米之郷 簡単な紹介』滋賀県立琵琶湖博物館
- 用田政晴編 2016『東アジアの水環境-水辺暮らしの記憶と記録-』(『琵琶湖博物館研究調査報告』第 28 号)、滋賀県立琵琶湖博物館
- 用田政晴 2016a「太湖・洞庭湖に琵琶湖の祖型を探す水環境民俗調査法」『琵琶湖博物館研究調査報告』第 28 号、滋賀県立琵琶湖博物館
- 用田政晴 2016 b「水環境民俗調査法の開発と

国際連携研究の軌跡」『淡海文化財論叢』第 8 輯

用田政晴・楊平ほか 2014『魚米之郷 - 太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし - 』滋賀県立琵琶湖博物館

楊 平 2012a「中国・太湖における暮らしと景観の保全」『東アジア内海文化圏の景観史と環境第 3 巻 景観から未来へ』昭和堂

楊 平 2012b「環境資源としての水を生かした村の実践 - 琵琶湖からみた太湖との比較研究の試み - 」『日中社会学研究』第 19 号

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計 30 件)

用田政晴、「水環境民俗調査法の開発と国際連携研究の軌跡」『淡海文化財論叢』第 8 輯、2016、pp.1-5、査読無

楊 平、稲作農耕社会にみる自然利用との深いかかわり、東アジアの水環境 - 水辺暮らしの記憶と記録、28、滋賀県立琵琶湖博物館、2016、pp.39-42、査読無

用田政晴、太湖・洞庭湖に琵琶湖の祖型を探す水環境民俗調査法、東アジアの水環境 - 水辺暮らしの記憶と記録、28、滋賀県立琵琶湖博物館、2016、pp.5-38、査読無

用田政晴、琵琶湖水系における湧水環境保全に向けた基礎資料整備と方法論の開発、東アジアの水環境 - 水辺暮らしの記憶と記録 - 、28、滋賀県立琵琶湖博物館、2016、pp.43-62、査読無

楊 平、環境の持続的保全は何で決まるのか - 資源利用から考える - 、日中社会学研究、23、2015、pp.8-14、査読有

Zhu, W., Li, M., Dai, X. and Xiao, M. Differences in vertical distribution of Microcystis morphospecies composition in a shallow hypertrophic lake (Lake Taihu, China), Environmental Earth Sciences, 73(9), Springer, 2015, pp.5721-5730. 査読有

Zhu, W., Sun, Q., Chen, F. and Li, M. Cellular N:P ratio of Microcystis as an indicator of nutrient limitation - implications and applications. Environmental Earth Sciences, 74(5), Springer, 2015, pp.4023-4030, 査読有

楊 平、従環境社会科学研究領域探討環境教育の方向、哲学社会科学版、15、河海大学、2014、pp. 21 - 23、査読有

用田政晴、展示紹介 琵琶湖博物館企画展示魚米之郷 - 太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし - 、民具研究、150、2014、pp.100-103、

査読無

YANG, P. Restoration of the relationship between human beings and nature-The application of Lake Biwa mitigation and life environmentalism. Journal of Lake Sciences, 5(26),2014,pp. 807-812,査読有
YANG,P. Interpretation of river management in Lake Biwa Basin from the angle of living environmentalism. WATER RESOURCES PROTECTION,1(31),Chinese Hydraulic Engineering Society,2014,pp. 16-21,査読有

ZHU,W., YANG,P. and GONG,M. Japan ' s multi-natural river regulation and its enlightenment to China. WATER RESOURCES PROTECTION,1(31), Chinese Hydraulic Engineering Society,2014,pp.22-29,査読有

楊 平、水辺生活にみる慣習的共生システムの形成と湖保全の持続可能性、湖の現状と未来可能性、3、松香堂書店、2014、pp.27-39、査読無

〔学会発表〕(計 20 件)

楊 平(2016 年 1 月 15 日)食用植物がたなく知恵-植物貯蔵をめぐって-、琵琶湖博物館研究セミナー、琵琶湖博物館(滋賀県草津市)

楊 平(2016 年 1 月 30 日)伝統的生業がたなく食文化 - 水田養魚と畑作から -、日中講演会「伝統知・植物利用・食 in 東アジア」、お茶の水女子大学(東京都文京区)

楊 平(2016 年 2 月 21 日)「魚食」を支える水田稲作、生物多様性会議「にじゅうまるプロジェクト」、国際自然 保護連合日本委員会、名古屋大学(愛知県名古屋市)

楊 平(2015 年 1 月 17 日)食用植物の利用と貯蔵について、科研共同研究成果発表会、お茶の水女子大学(東京都文京区)

楊 平(2015 年 2 月 27 日)植物資源の利用に関する社会的アプローチ、琵琶湖博物館領域会議、琵琶湖博物館(滋賀県草津市)

用田政晴(2014 年 12 月 11 日)太湖と琵琶湖講演会、河海大学(中国江蘇省南京市)[琵琶湖からのコメント]

楊 平(2014 年 12 月 11 日)太湖と琵琶湖講演会、河海大学(中国江蘇省南京市)[日中湖沼比較コメント]

楊 平(2014 年 10 月 17 日)企画展示からみた湖と人の暮らし、琵琶湖博物館研究セミナー、琵琶湖博物館(滋賀県草津市)

楊 平(2014 年 12 月 11 日)太湖と琵琶湖、講演シンポジウム(研究討論)、河海大学(中国江蘇省南京市)

楊 平(2014 年 12 月 6 日)「水田養魚」にみる稲作農業、第 3 回生物多様性を育む農業国際会議、大崎市民会館(宮城県大崎市)

用田政晴(2013 年 6 月 21 日)琵琶湖水系における湧水環境保存に向けた考古民俗学的アプローチ、琵琶湖博物館研究セミナー、琵琶湖博物館(滋賀県草津市)

楊 平(2013 年 7 月 16 日)湖の保全と暮らし、洞庭湖・びわ湖流域共同環境セミナー、長沙金源大飯店(中国湖南省長沙市)

楊 平(2013 年 8 月 16 日)資源利用をめぐり暮らしと景観、琵琶湖博物館研究セミナー、琵琶湖博物館(滋賀県草津市)

〔図書〕(計 3 件)

用田政晴、楊平ほか、『東アジアの水環境 - 水辺暮らしの記憶と記録 - 』(『琵琶湖博物館研究調査報告』第 28 号)、滋賀県立琵琶湖博物館、2016、pp.1-110

用田政晴、楊平、朱偉ほか『魚米之郷 - 太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし - 』滋賀県立琵琶湖博物館、2016、pp.1 - 112

用田政晴、(楊平訳)『魚米之郷 簡単な紹介 日中共同博物館・大学講演会 魚米之郷を語る - 太湖・洞庭湖の水辺の暮らし - 要旨集』滋賀県立琵琶湖博物館、2014、pp.1-8

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

用田 政晴(YODA, Masaharu)

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・特別研究員
研究者番号 00359259

(2) 研究分担者

楊 平(YANG, Ping)

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・主任学芸員
研究者番号 50470183

(3) 連携研究者

朱 偉(ZHU, Wei)

河海大学・環境工程学院・教授

研究者番号 70297787

(4) 研究協力者

植田 文雄(UEDA, Fumio)

佛教大学・文学部・非常勤講師

劉小豹(LIU, Xiaobao)

湖南省博物館・副館長

李易志(LI, Yizhi)

湖南省博物館・資料部・副主任